

# 2004年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量										
	漁獲	産地	輸入	輸出	消費地			消費支出	在庫	加工	
					生	冷	塩	生(千)		塩干	缶詰
15	262	225.1	0.63	10.5	43.8	9.6	7.9	2,434	44.9	22.9	8.34
16	207	181.3	0.60	20.9	41.7	10.8	8.0	2,267	50.9		
%	79	81	94	199	95	112	101	93	113	0	0

年	価 格						全サンマ		
	産地	消費地			輸入	輸出	水揚	価格	消費支出
		生	冷	塩				生(円)	
15	67	325	251	442	190	109	260.4	68	1,686
16	108	367	215	412	153	80	205.0	112	1,550
%	161	113	86	93	81	73	79	165	92

## 資源と漁獲量

サンマの資源量は、1980年代後半～1990年代中期は良好な資源状態を保っていたが、1998・1999年以降急激に資源水準が低下した。その後、2000年以降資源量水準は高位であり1990年代前半よりは少ないものの2004年の資源量水準は高位といわれている。

16年の漁獲量は前年を上回る約21万トン前後であったとみられる。

また、本年はTACの関係もあって全漁期を通じて漁獲は減少し、8月下旬の三陸の魚価急落もあり直ぐに休漁措置が講じられたのを始め、その後も積荷制限も含め漁期終了まで漁獲の平準化のための休漁措置が恒常的に講じられた。

本年は前年より1～2日遅れて7月10日から流し刺網、同20日には5トン未満船の棒受網、27日には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして棒受網の20トン未満船が8月10日、同40トン未満船が8月15日、同40トン以上大型船が8月20日解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は近年では低かった2003年の2541トンをかなり下回る1690トンの水揚げであった。その後8月以降、中旬にやや好漁となり昨年同期を上回ったが、8月下旬に以降は昨年を下回って推移した。特に盛漁期の9月に入ってから水揚げ制限や休漁措置等もあってこの傾向は顕著であった。その後もTACを眺めながらの漁が続き、最終的には12月20日をもって終漁した。

本年の初期漁場は昨年同様釧路南東落石沖合から始まる展開で、その後の東寄りの花咲沿岸に移動し、8月に入ってから道東沖合から花咲沖合までの親潮沿岸分枝に形成された。

9月に入ってから昨年より2旬遅く下旬に三陸の黒崎沖と襟裳岬南東沖にも形成されるなど第一分枝、第二分枝に分かれて形成された。本年も道東沖一帯で長く主漁場が形成された。10月に入ってから中旬に三陸の綾里崎や金華山沖にも漁場形成が本格化し、11月に入ってから常磐沖、犬吠崎沿岸に主漁場が形成された。そして道東沖合漁場は10月末でほぼ終漁となった。なお、本年のオホーツクは、10月下旬と昨年よりやや遅くから始まり11月上旬まで続き昨年(12トン)を上回る427トンであった。

魚体は、本年は予報とおり昨年に比べると当初から体重、体長とも大きく、7月は大型29-31cmの140-180g主体、8月は30-31cmの140-180g主体で下旬からは中型も混じるようになった。9月に入ってから30-31cm 160g主体に中型の混じる比率も多くなり始め、中旬以降は中・小

型の混じりも目立つようになってきた。大型船が出漁した8月下旬頃から9月まで大型の割合が急増したが、その後は中型主体に変わり、10月以降は中型魚(26-28cm)主体に小・大混じりの組成に変わってきた。通算では大型59%(82%)、中型41%(16%)、小型0%(2%)であった。

また本年は漁期当初から大型魚が多く漁期後半まで続き、鮮魚向けに集中したため、需要を越えた供給結果となり魚価急落の一因になった。

魚価は、スタートから本州側主体に極めて多い在庫だったこともあり、初漁期は極端な高値にはならなかった。大型船が出漁し寄港が始まった8月下旬に道東では堅調だったものの三陸で2桁台急落した。しかし、その後は時化、TACを含め各種措置等の効果で水揚げが昨年同期を下回ったこともあり前年のような極端な暴落もなく推移した。その結果、通算も108円で前年の67円を大きく上回った。ただ、本年の水揚げに近かった前々年に比べるとまだかなりの開きはみられた。

## **在庫量**

本年は近年では極めて高水準の7.5万トンの越年在庫から始まったが、新漁前の6,7月においても前年を約1万トン上回る高い水準であった。そして例年在庫が最も少なくなる8月には前年より約8千トン以上も多い高水準の在庫(過去5年比では2万トン多い)となった。しかし大型船も出漁した8月中旬以降、特に下旬前半に漁も好転し、三陸での魚価の急落の中で休漁や水揚げ制限もあり、9月以降在庫は昨年より少なくなり減少傾向に転じた。その結果越年在庫も5.8万トンと前年(7.5万トン)を大幅に下回った。しかしまだ例年に比べると高い在庫水準で、前々年(5万トン)を上回る高水準であった。

平均在庫量は、前半の多かった在庫を反映し5.1万トンで前年(4.5万トン)を大きく上回り、近年でも最高に水準となった。

## **消費地入荷量と価格**

16年の消費地入荷量(10大都市)は、5.3万トン(生4.2万トン、冷1.1万トン)と生主体にほぼ前年(5.4万トン、生4.4万トン、冷1万トン)並みで多かった。

本年は、上半期の消費地への入荷量が多かった在庫を反映して例年以上に多く、下半期も、特に9月を中心に昨年に近い入荷がみられる。

本年は産地での魚体が大きく、前年同様40尾、45尾サイズ主体であった。

また、本年の塩干物の入荷は0.8万トンで引続き前年(0.8万トン)並みであったが、最近塩干物の数量変化は小さい。

本年の価格のピークは7月にみられ、8月に入って急落場面もみられたが、その後は大きな急落もなく各月とも前年を上回る推移であった。

平均価格は生367円(前年325円)、冷215円(前年251円)、塩412円(前年442円)で、生鮮は産地価格と同様な傾向をしめしたが、冷凍、塩干は昨年の安値物原料も多く何れも前年を下回ったのが特徴。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、数量、金額ベースとも前年を下回ったが、単価的には殆ど昨年と変わりがなかった。

## **輸出入**

本年の輸入は、595トンでほぼ前年(631トン)並みであった。

これは国内在庫が潤沢であったことが唯一最大の要因であり、昨年に続いて極めて少量であった。

輸出はH4年をピークに近年減少傾向が続いているが、本年は2.1万トンと前年(1.1万トン)を大きく上回り、減少傾向に歯止めがかかった。

価格は、輸入153円(前年190円)、輸出80円(前年109円)で何れも前年を下回った。

本年は、輸入が低調な年であったが、輸出はサケやスケトウダラ等中国、韓国等への輸出が目立っている。

本年の輸出は、韓国が最も多く約半分の9600トンで首位の座を奪回し、続いて昨年一番多かった中国で、次にフィリピン、米国、サモア、フィジーであった。